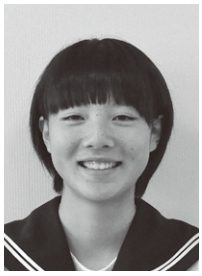
優良賞

家族の大切さ



青森市立西中学校　３年　菅原　万椰

私は兄、姉、妹を持っています。よく「仲が良いね。」と友達に言われます。私たちの間には“ケンカ”という言葉が存在しないほど本当に仲が良いです。毎日楽しくご飯を囲んだり、勉強を教え合ったり、スポーツを楽しんだり。あの日が来るまではこの日々が自分の当たり前だとばかり思っていました。

私は特に妹と仲が良く、家にいる時のほとんどは遊んだり、一緒に行動したりしていました。妹はとても楽しい人でいつも笑っていますし、私にいつもつきまとってきます。しかし妹には1つの欠点があります。それは体が弱く、喘息を患っていることです。その喘息が3年前、妹を苦しめました。

10月中旬。妹の運動能力の高さが評価され、妹はトップアスリートという選抜選手の体力テストに参加しました。そのとき妹は苦しみを覚えました。家で様子を見ることになり帰宅後、仰向けになって寝たのですが容体が悪化してしまいました。妹の顔は激しくゆがみ「うぅっ。」と苦しむ声を幾度もあげました。目には大粒の涙まであり ましたが、私は喘息を患っていないため、妹の気持ちが分かりませんでした。分からないんです。妹が苦しんでいるのをただ見守ることしかできなかったのです。いっそ自分が苦しみを引き受けてあげたい。なんで妹だけがこんな目に合わなければならないんだろう。自分に無性に腹が立ちました。

「何が姉だよ。妹の苦しみを分かってあげられなくて。姉失格だわ。」

何度も何度も心の中で叫んでいました。

その日のうちに妹の入院が決まりました。1週間でした。楽しい日々ならとても早く感じる月日がこんな悪夢があるとこんなにも長く感じるんだなあと思いました。父母が病院へ荷物を移すために妹の荷物を整頓していました。そんな時には妹の存在が消えていくのを感じました。学校でも「今、妹は何をしてるんだろう。」と考えたり、「今苦しいのかなあ。」とつい考えたりしていました。今思うと妹をこんなに思ったのは初めてでした。この時、初めて私の中で当たり前が当たり前ではなくなりました。1週間後、妹は無事退院しました。その表情はいつものあの優しい笑顔でした。私は心の温かさを胸に妹に抱きつこうとしました。が、一足遅れて妹に先を越されてしまいました。ああ、妹の声だ。妹が帰ってきたんだ。うれしさが全開でした。

この出来事から私は家族の大切さを学びました。例えば家族が急に事故や病気で亡くなった。そんな時、誰にだって後悔の念はありますよね。いや、絶対にあるんです。そんな後悔を少しでも減らしてほしい。だから私はみなさんに訴えます。家族との1日1日を大切にしてください。家族のくせ、小さなしぐさ、笑顔。より多くのことを発見してください。また、家族がどんなに嫌いな人でも良いところを探してあげてください。きっと好きになれます。絶対に後悔は減りますし、小さなしぐさや笑顔などの家族の思い出は少しだけ増えます。今私の兄は、遠くにいます。そして家に帰らず勉強に励んでいます。でも、今でも兄の笑顔や口ぐせ、多くのことを思い出すことができます。3年前の悪夢のおかげで私の中での家族の価値観は大幅に上がりました。妹には本当に感謝しています。しかし、私のような体験はみなさんにはできるだけしてほしくありません。だから家族の観察からでもしてみませんか。あなたのためにも、家族のためにも。